

使徒の働き20章 「牧者パウロの心」

1A 兄弟たちへの励まし 1-16

1B マケドニアとギリシアへの旅 1-6

2B トロアスでの慰め 7-12

3B アソスまでの陸路 13-16

2A 長老たちへの気遣い 17-38

1B 最後になる言葉 17-35

1C 謙遜と涙の奉仕 17-21

2C 命を惜しまぬ使命 22-24

3C 長老たちの責任 25-31

4C みことばと残した手本 32-35

2B 涙の別れ 36-38

本文

使徒の働き 20 章を開いてください。私たちは前回、パウロのエペソにおける宣教を見ましたが、そこから離れて、エルサレムに向かう旅を見ます。エペソにいる時に、パウロはすでに御霊に示されて計画を立てていました。「19:21 これらのことがあった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通してエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。」パウロは、これまでアジア、そしてマケドニアとギリシアの宣教を行っていましたが、かなり福音が広がり、教会も建て上げられていきました。そこで、御霊が彼に示したのは、ローマへの宣教です。ローマ帝国の首都です。けれども、その前にしたいことがあり、それがエルサレム訪問です。

それは、コリント人への手紙などを見ますと、ユダヤにいる貧しい兄弟たちに、異邦人主体の教会からの支援を持って行くということ。それによって、キリストの御体が、ユダヤ人、ギリシア人が一つになっているということ。それから、彼には同胞が救われてほしいという願いを持っていました。ローマ人への手紙 9 章 3 節で、「私は、自分の兄弟たち、肉による自分の同胞のためなら、私自身がキリストから引き離されて、のろわれた者となってもよいとさえ思っています。」とまで言っています。しかし、それが同時に自分の命の危険も冒すような試みであることも知っていました。そのエルサレムへの旅を急いでいるパウロの姿を見て行きます。

1A 兄弟たちへの励まし 1-16

けれども、まず、エペソにいるパウロは、マケドニアとアカイア、今のギリシャですね、そこを通過してからエルサレムに行くつもりです。そこで、教会の兄弟たちを励まします。また、ユダヤの貧しい

兄弟たちを助ける募金をします(1コリント 16:1、Ⅱコリント 8-9 章)。

1B マケドニアとギリシアへの旅 1-6

¹騒ぎが収まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ、マケドニアに向けて出発した。

野外劇場における騒ぎのことです。アルテミスの神殿の銀細工人たちが、自分たちの模型を買ってくれる人たちが少なくなったので、偶像から立ち返るように説いていたパウロを槍玉に上げて、騒動を起こしました。その騒ぎが収まると、彼は自分が伝えられる福音の戸は閉じられたと感じたので、エペソにいる兄弟たちを集めて励まし別れを告げました。宣教において、必ず、別れなければいけない時がきますね。目的は、御国を人々が受け継ぐようにするためですから、自分がその働きを永続させるわけではありませんから、別れがあります。その時に、彼らがいつまでも信仰に堅く立っているように励ますことが必要です。

そして、マケドニアに行きますが、おそらく初めに福音を伝えたピリピに行ったのでしょう。ところで、パウロはエペソにいましたが、他の教会、特にコリントにある教会のことで大きな問題が起こっていたので、第一の手紙を送っていました。そして、マケドニアにいた時に、コリント人への第二の手紙を書いています。旅をしながら、ギリシアへと向かいながら、その起こっていることを対処していました。彼は、エペソからトロアスに行き、そこからピリピに行ったと思われます。トロアスで、コリントの教会に遣わしていたテトスと合流して会えると思っていたら、会えなかったため、心に安らぎがなく、そのままマケドニアに行ったことを書いています(Ⅱコリ 2:12-13)。そしてマケドニアで、テトスに会うことができ、深い慰めを受け、またコリントの人たちが、パウロの厳しい手紙に正しく応答し、悔い改めていることを聞いて、さらに慰められたと書いています(Ⅱコリ 2:5-9)。現地の教会への気遣いだけでなく、これから再訪問する遠い教会のことも同時に気遣っていました。

²そして、その地方を通り、多くのことばをもって弟子たちを励まし、ギリシアに来て、³そこで三か月を過ごした。そして、シリアに向けて船出しようとしていたときに、パウロに対するユダヤ人の陰謀があったため、彼はマケドニアを通して帰ることにした。

マケドニアから、ギリシア地方に来ました。この間に、ローマ人への手紙 15 章 19 節によると、イルリコというところまで行ったと考えられます。マケドニアの北西の地域です。そこからそのまま南にいてギリシアに来ました。コリント人への手紙で訪問することを告げていましたので、コリントで三か月を過ごしました。ここで、パウロはローマ人に手紙を書いたと思われます。ローマに何度となく行こうとしたが妨げられたということを言っています。おそらく、ベレアから逃げてアテネに行った時、実はローマのほうに行きたかったのかもしれませんが。そして今、コリントにいて、そのままローマに行くこともできます。けれども、すでにそこには兄弟たちがいて、教会もあります。それでま

ずエルサレムに行き、それからイスパニア、すなわちスペインに行く途中でローマに立ちよります、ということ、15章で話しています。

これで、マケドニアとギリシア一帯の兄弟たちへの励ましをすることができました。三か月過ぎたのは、季節が冬で、地中海が荒れるので、春を待っていたからだと思われます。それで、春が近づいてシリア、すなわちツロやシドン、アンティオキアの方に行く船を見つけて、それに乗ろうとしていました。ところが、パウロを殺そうとするユダヤ人たちの陰謀がありました。船に乗っている間に突き落として殺すことはとても簡単です。また、パウロは献金を集めたお金がたくさん運んでいますから、慎重に動きました。かなり遠回りになりますが、陸路でマケドニアを通過して帰ることにしました。

⁴ 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリストルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。

七名もの同行者がいました。大金を持っているので、相当、気を付けていたのでしょう。

マケドニアからは三人にて、まずベレア人ソパテロがいます。そしてテサロニケ出身のアリストルコとセクンドがいます。アリストルコは、既にエペソで野外劇場の中に引きずり出された人として出てきました。また、彼はパウロがカイサリアからローマに囚人として船に乗せられる時にも、同行しています。そして、ローマでパウロは軟禁状態になっていましたが、パウロと共に囚人になっていると、コロサイ人への手紙でパウロは書いています(4:10)。ピレモンへの手紙にも、登場します。

残りの四人は、アジア方面からの人々です。デルベ人のガイオ、リステラ出身のテモテ、それから、アジア人、すなわちエペソなどの地域から、ティキコとトロフィモがいました。ティキコは、ローマで囚人になっているパウロから、エペソ人への手紙を受け取り、それをエペソに運んでいきました。コロサイ人への手紙も同じように、ティキコに預けています。パウロが二度目のローマでの幽閉で、テモテに第二の手紙を送る時に、ティキコを彼のところに遣わしています。

⁵ この人たちは先に行って、トロアスで私たちを待っていた。⁶ 私たちは、種なしパンの祭りの後にピリピから船出した。五日のうちに、トロアスにいる彼らのところに行き、そこで七日間滞在した。

「私たち」という言葉が出てきました。つまりルカです。ルカはピリピにいたようです。そして、パウロの一行はピリピも訪れずに、そのままネアポリスの港からトロアスに行ったのでしょう。ルカの一行は、種なしパンの祭り、つまり過越の祭りの時期をピリピで過ごしたのでしょう。それから船に乗って、トロアスに向かいました。パウロがかつて、ここでマケドニア人の夢を見たところです。ネアポリスからトロアスまで五日かかったとありますが、パウロが初めて行った時は二日しかかかりませ

んでしたから、天候や風向きで船の進み具合はかなり変わってしまうことがよく分かります。今の
ような定刻に飛行機が出て、時間通りに到着する予定とは違いますね。

七日間、トロアスで滞在していたのも、次の船便を待っていた期間だったのでしょうか。それと共に、
七は完全数ですから、神の働きが顕著に現れることを予告しているのかもしれませんが。

2B トロアスでの慰め 7-12

⁷ 週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。パウロは翌日に出発することになっていた
ので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。

パウロは、トロアスにいる兄弟たちとも、別れなければいけません。ですから、残る時間を最大
限使って、夜中まで人々と語り合っていました。旅立つ前日が、「週の初めの日」です。これは日
曜日のことですが、ユダヤ人の一日の数え方は夕から始まります。今でもイスラエルは、安息日
は土曜日ではなく、金曜日の日没から始まります。そして土曜日の日没が来て、安息日が終りま
す。週の初めの日は、ですから土曜日の晩です。すでに夜になっていたのです。

その時に彼らは「パンを裂くために集まった」とあります。教会の行うことを思い出してください、
2章42節にありましたね、「彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈
りをしていた。」であります。パンを裂くのは、主の死を思い出すためのものであり、また互いに食
事をするでもあったでしょう。私たちの教会では、月に一回、聖餐式を行っていますが、それに
限らず、週ごとに行っても構いません。そして、週の初めに行っていました。つまり、彼らの時計で
は日曜日です。またコリント人への手紙第一16章1節に、「いつも週の初めの日に、収入に応じて、
いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。」とあります。つまり、ここから日曜日に集まる習慣が
始まっていたことが分かりますね。イエスがよみがえられたのが、週の初めの日です。聖霊が降
臨されたのが、五旬節、つまり週の初めの日です。

けれども、どの日を、主を礼拝する日とするかは、ローマ14章によると、毎日が主の日だとする
人もいるし、特定の日を主の日とする人もいるということで、自由が与えられています。大事な
のは、集まることです。

⁸ 私たちが集まっていた屋上の間には、ともしびがたくさんついていた。⁹ ユテコという名の一人の
青年が、窓のところに腰掛けていたが、パウロの話が長く続くので、ひどく眠気がさし、とうとう眠り
込んで三階から下に落ちてしまった。抱き起こしてみると、もう死んでいた。

悲劇が起こりました。皆が屋上の間を集まっていました。三階の大広間です。灯が沢山つしてい
た、ということは、酸素が多く消費されていたことだと思います。さらに、人々が集まっていますから、

なおさらのこと酸欠状態です。そこで窓に青年ユテコが腰かけていましたが、換気口にいたのでよかったです。眠気が指してしまいました。何とそこから落ちて死んでしまいました。

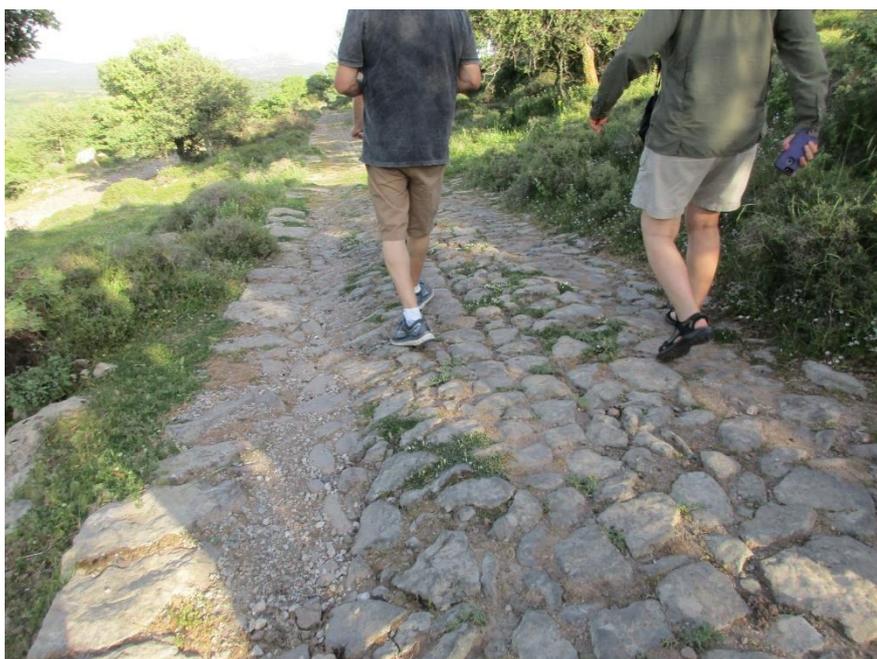
¹⁰ しかし、パウロは降りて行って彼の上に身をかがめ、抱きかかえて、「心配することはない。まだいのちがあります」と言った。¹¹ そして、また上がって行ってパンを裂いて食べ、明け方まで長く語り合っ、それから出発した。¹² 人々は生き返った青年を連れて帰り、ひとかたならず慰められた。

旧約時代の預言者たちが行ったことが、死者からの生き返りの奇跡です。エリヤとエリシャが行いました。そして、主ご自身がヤイロの娘を生き返らせました。その時、主は、「死んでいない、眠っているだけです」と言われましたが、パウロもここで、確実に死んでいるのに、「まだいのちがあります」と言っています。つまり、生き返らせたのです。使徒ペテロも、ヤッファにドルカスという女性が死んでしまって、ペテロが赴き、祈りました。そして「起きなさい」と命じたら、起きました(9:40)。ですから、パウロは、かつての預言者が行い、主ご自身が行われ、そして使徒ペテロも行った奇跡を行っています。ここからパウロが確実に、主の使徒であることが分かります。実は、いろいろなところで、エルサレムかた来た者と称して、パウロは偽物の使徒であると吹聴している者たちがいました。「Ⅱコリ 12:12 私は忍耐を尽くして、あなたがたの間で使徒としてのしるしを明らかにしました。しるしと不思議と力あるわざによってです。」しるしによって彼が使徒であることが明らかにされています。

けれども、パウロはこういった力を振りかざすような人ではありません。あくまでも青年を立ち上げらせ、人々に慰めを与えるためです。生き返った後に、続けて語り続けたというところに、彼の指導者としての力量を見ます。いろいろなハプニングがあっても、それを主にあって対処し、元々しなければいけないことを行っていくことです。

3B アソスまでの陸路 13-16

¹³ 私たちは先に船に乗り込んで、アソスに向けて船出した。そこからパウロを船に乗せることになっていた。パウロ自身は陸路をとるつもりでいて、そのように決めていたのである。



トロアスからアソスまでは、約 30 キロです。パウロは独りで陸路を取ると決めていたようです。パウロがここで、祈りを献げていたのではないかと思います。歩きながら祈っていたのではないかと。エルサレムに向かう急いだ旅だったので、トロアスでは明け方まで話し、主に対して祈る時は歩いている時だったと考えられます。パウロが、後でこう明かします。「20:23 聖霊がどの町でも私に証して言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです。」ちなみに、ここはローマ街道が走っていて、そこを 2018 年の旅で歩くことが出来ました。今は、農業を営んでいる人たちが使っている道になっています。けれども、二千年間、使用できているのですから驚きます。

¹⁴ こうしてパウロはアソスで私たちと落ち合い、私たちは彼を船に乗せてミティレネに行った。¹⁵ 翌日そこから船出して、キオスの沖に達し、その次の日にサモスに立ち寄り、さらにその翌日にはミレトスに着いた。

ミティレネは、レスボス島という西アジアにほど近い大きな島にある町です。今はギリシャ領になっていますが、トルコから目と鼻の先です。そして、さらに南にキヨス島があります。有名なギリシアの詩人ホメロスが誕生した地です。その沖合を通過して、エペソの西にあるサモス島に立ちよりました。サモス島では、ピタゴラスが誕生しています。そして、エペソから南に 50 キロ離れたミレトスに到着しました。

¹⁶ パウロは、アジアで時間を取られないようにと、エペソには寄らずに航海を続けることに決めていた。彼は、できれば五旬節の日にはエルサレムに着いていたいと、急いでいたのである。

エペソの港に行く船に乗っていれば、エペソにいる人々に会えたのですが、とにかく急いでいました。エペソ行きの船ではなく、ミティレネ行きの船に乗っていたのです。パウロの考えていたのは、五旬節の日にはエルサレムに間に合わせることです。トロアスでは既に種なしパンの祝いが行われた後でしたから、あと一か月ほどしかなかったのではないのでしょうか。パウロは、自分がユダヤ人で五旬節に間に合わせたいという思いもあったでしょうが、五旬節であれば世界中からユダヤ人たちがエルサレムに集まってくる。そうすれば、いろいろな人にエルサレムで会うことができる、と思ったことでしょう。パウロのネットワークは広いので。

2A 長老たちへの命令 17-38

1B 最後になる言葉 17-35

1C 謙遜と涙の奉仕 17-21

¹⁷ パウロはミレトスからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼び寄せた。

パウロは、自分がエペソに行くとき次の船便に遅れてしまうと判断したのでしょう、逆に彼らと呼び寄せました。エペソの「長老たち」とあります。前にも使徒の働きに出てきましたが、教会を治める

ために立てられている人たちを長老と呼んでいました。旧約時代からイスラエルの民の中で上に立つ人を長老と呼んでいました。教会でも同じように呼んでいます。今は、牧師が立てられている人ですが、実は同じ人物です。指導者として、どの働きを強調しているかで呼び名が変わっています。後で出てきますが、パウロはここで最後の別れとして彼らに言葉を残します。教会の長老たちに伝えなければいけない言葉を伝えます。

¹⁸ 彼らが集まって来たとき、パウロはこう語った。「あなたがたは、私がアジアに足を踏み入れた最初の日から、いつもどのようにあなたがたと過ごしてきたか、よくご存じです。

パウロは、自分がエペソでどのように主に仕えてきたのかを振り返っています。なぜなら、後で出てきますが、エペソの教会の中にも、パウロが宣べ伝えた恵みの福音とは違った教えを教えている者たちが出て来る気配があったからだと思われます。そういった者たちは、エルサレムから来た者であると吹聴し、パウロを批判して、彼は真正な使徒ではないとします。そして、まことしやかな言葉を使って人々をだまし、自分自身に引き付けるのです。パウロは、そのことを後ではっきりと話しますが、テモテへの第一の手紙で、エペソにいるテモテがそうした論争をしかけてくる、違った教えをしている者たちがいて、テモテがその人々を戒めるのに一苦勞している話が出てきます。

偽教師と真正な教師との違いは何か？それは、「隠し立てのない生活」です。パウロは、自分が三年間、ここでやってきたことについて、長老たちが知らないということがないぐらい、彼らの前に隠すことはしませんでした。「アジアに足を踏み入れた最初の日から」と言っていますが、12 人の人がイエスの名によってバプテスマを受け、聖霊も受けた時からですね。それらも、すべて長老たちに知られていることでした。異端の人たちは、隠すことが好きです。ある教会のグループが社会問題になるような伝道活動をしていましたが、それは大学で就活の相談セミナーをしますと言って、それで後になってそれがキリスト教であること伝えたそうです。それで顰蹙を買ったのですが、キリスト教会は自分たちが教会であることを隠したりしません。

¹⁹ 私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。

先に、ユダヤ人の陰謀があるから、シリア方面に行く船に乗らないで、陸路を取ったという話を読みましたが、パウロ暗殺団みたいなのが、いろいろな所にいたようです。比較的、新しい考えには寛容なエペソであっても、ユダヤ人の陰謀があったことをパウロはここで話しています。

そして大事ななのは、そういった試練が数々あったけれども、「謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。」というところです。パウロが自分で自分を謙遜だと言っているのは高慢ではないか？と感じた方がおられるかもしれません。それは、謙遜の意味が私たちの普段使っているの

と違うからです。

山上の垂訓で、イエス様が、「マタ 5:5 柔和な者は幸いです。その人たちは血を受け継ぐからで
す。」と言われました。この柔和は、「謙遜」とも訳せる言葉です。これは「仕返ししない」とも言い換
えることができます。主に仕え、命じられていることを忠実に行っていく時に、反対し、中傷し、危害
を加える者たちがいても、それでも仕返しするのではなく、ただ主にその苦しみを持って行って、主
に思い煩いを知っていただき、なおのこと主に仕えるということです。ダビデが、主君であるサウル
から殺されようとされて逃げているのに、エン・ゲディにおいて、また他の場所で、サウルをいくら
でも打ちのめすことができる機会がありました。けれども、ダビデは仕返しませんでした。主に言
われていることではなかったのです。そうやって、次第にダビデに人々が集まるようになり、サウル
が死んだ後に、ダビデがイスラエルの王となったのです。それと同じように、パウロはユダヤ人の
陰謀によって様々な試練を受けましたが、それでも涙をもって堪えて、主にお仕えしてきました。

²⁰ 益になることは、公衆の前でも家々でも、余すところなくあなたがたに伝え、また教えてきました。

²¹ ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証し
してきたのです。

パウロは、教えることにおいても、隠すことがなく、益になることは何でも教えました。益にならな
いことは、すべて伝える必要はありません。しかし、益になることは何でも隠し立てせずに教えた
のです。そして、パウロはティラノの講堂などでは公衆の前で伝えていました。けれども、それ以外
に、「家々でも」教えていました。彼は小さな集会でも忠実に同じように教えていたのです。カルバ
リーチャペルの牧師たちが来日するようになった初期のころ、ウェイン・テラーさんという牧師が
日本にいらしたのですが、本当に小規模の集会で招いた人がとても申し訳ないという思いになっ
たそうです。彼の牧会する教会は、何千人も集まりますから。ところが、全く変わらずに喜んで引き
受けて、全く同じように教えたという話を聞いたことがあります。

そしてパウロが教えていたのは、「神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰」で
す。午前礼拝で話しました、恵みの福音です。ここで大事なものは、「ユダヤ人にもギリシア人にも」
ということですね。エペソ宣教をしていた時、19 章に、「アジアの住む人々はみな、ユダヤ人もギ
リシア人も主のことばを聞いた。(10 節)」とあります。パウロが宣べ伝えていた福音は、ユダヤ人
だけでなく、異邦人にも救いを与えるものでした。「ロマ 1:16 私は福音を恥としません。福音は、
ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべてのの人に救いをもたらす神の力です。」

2C 命を惜しまぬ使命 22-24

こうして、三年間のパウロの働きを振り返りましたが、次は自分がエルサレムに行こうとしている
ことを伝えます。

²² ご覧なさい。私は今、御霊に縛られてエルサレムに行きます。そこで私にどんなことが起こるのか、分かりません。²³ ただ、聖霊がどの町でも私に証して言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです。

「御霊に縛られて」エルサレムに行くと言っています。御霊が縛られるのか？と思いますが、それは、エルサレムに行けば、「鎖と苦しみが私を待っている」それにも拘らず、エルサレムに向かうように促しを受けていたということです。彼は、エペソにいた時からマケドニア、ギリシアに行く時にも、自分がエルサレムに行こうと計画を立てて以降、どこに行っても鎖と苦しみが待っていることを聖霊が示しておられたのです。

²⁴ けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音を証しする任務を全うできるなら、自分のいのちは少しも惜しいとは思いません。

パウロの生きている姿勢がここに現れています。「自分のいのちは少しも惜しいとは思いません」ということです。ここにキリスト者の本来の焦点があります。それは、地上での命はひと時であり、私たちの本望は天であり、霊的な永遠のいのちなのだということです。パウロは、ローマで牢に入られている中でピリピ人への手紙を書きました。皇帝ネロの前に出て、もしや死刑に処せられるかもしれません。けれども、彼の心は喜びで満ちていました。「1:23-24 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。」天において主にお会いできるという希望がありますから、そちらのほうがはるかに優れているのです。パウロは、第三の天にまで引き上げられたこともありますから(Ⅱコリ 12:1-4)、その満ち満ちた栄光を見ているから、地上に残されるよりも、はるかに優れていることを知っています。

そして、パウロは自分の生きていることは、目標があつてのことであり、使命があり、それを走りぬぐためにあることを知っていたのです。「自分の走るべき道のりを走り尽くし」と言っていますね。当時の世界、ローマ帝国ですが、ギリシアの文化や習慣が色濃く残っていた時に、オリュンピア大祭、すなわちオリンピック競技も盛んに行われており、走る姿はローマ・ギリシア社会に生きている人たちにはとても身近でした。パウロは、信仰によって生きることをしばしば競走に例えています。競走選手が、目標に向かって走るために、妨げになるようなものは身に付けないように、キリスト者生活は、自分に与えられた務めを果たすことがあれば、他の事柄は余計に身に着けない必要があります。それが思い煩いになり、足枷になるのです。

パウロは、エルサレムに行っても結局は死なず、またローマで皇帝の前に立っても死刑判決は出なかったのですが、二回目に捕らえられローマの牢にいた時は、死刑になることはほぼ確実にあることが分かっていました。「Ⅱテモ4:7-8 私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信

仰を守り通しました。8 あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」

そして、命を惜しまないと言ったのは、「神の恵みの福音」です。これについては、午前礼拝でじっくりをお話ししました。今、律法主義的な違った教えがエペソに入ってこようとしています。恵みの福音のゆえに、パウロを引き落とそうとする不穏な動きが、ほんの少し起こっていたのでしょう。

3C 長老たちの責任 25-31

²⁵ 今、私には分かっています。御国を宣べ伝えてあなたがたの間を巡回した私の顔を、あなたがたはだれも二度と見ることはないでしょう。

パウロは、エルサレムに行って死も覚悟していると言ったので、今、ここで会えるのは最後になるだろうと言っています。結局、彼はエルサレムも生き延び、ローマまでも行き、皇帝ネロの前に出ても釈放されたことが、初代教会の指導者の文献から知られています。彼はローマからイスパニア、スペインに行ったと書いています。ですから、死ななかったけれども、エペソの方には戻らなかったかもしれません。ですから彼の言っている通りだったのかもしれませんが。

パウロが彼らに覚えてもらいたいのは、「御国を宣べ伝えてあなたがたの間を巡回した私の顔」であります。パウロが宣べ伝えていたのは、神の国です。神を王とする国です。バプテスマのヨハネ、そして主ご自身が、「神の国は近づいた。」と言って、宣べ伝えた福音です。そのキリストが来られて、苦しみを経たのちに栄光の中に入れ、神の右の座に着いておられます。聖霊を与えられ、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも救いを与え、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つとなる教会が建てられます。そして、主は天から戻って来られて、万物を刷新されるのです。

²⁶ ですから、今日この日、あなたがたに宣言します。私は、だれの血に対しても責任がありません。

²⁷ 私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。

パウロは、これまでユダヤ人に福音を伝え、受け入れない者たちに使った言葉を、今、長老たちにも使っています。「だれの血に対しても責任がありません。」であります。預言者エゼキエルに対して、主なる神が、「あなたは見張り人である」として、警告したのであれば、責任を免れて、聞いた者が聞かなければ、聞いた者だけが滅びる。けれども警告しないならば、あなたも滅び、また聞かなかった者たちも滅びるという警告です(33章参照)。伝えることそのものに、神から任された責務があるということです。

そして、パウロは、「神のご計画のすべてを、余すところなく」と、全体を伝えたことを強調してい

ます。覚えていますか、復活したイエスご自身も、エマオに行く弟子たちに、「ルカ 24:27 モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。」とあります。神のご計画の全体を知らせること、また聖書全体にあるキリストについてのこと、それを説き明かすのは、神の御心であることが分かります。それで、私たちカルバリーチャペルは、創世記から黙示録までの全ての書を順番に教えていく方式を取っています。必ずしも、それだけではないのですが、けれども、自分に都合の良いところだけを教え、バランスを崩し、よもやすると、使徒たちが教えていることとは違った教えに陥らないとも限りません。神のご計画の全体を見ていくことによって、私たちが健全に育っていくことができると信じています。

²⁸ あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

長老たちに対する命令です。もはやパウロはここにいない。あなたがたが、教会を牧会しなければいけないことを教えています。ここで分かりますが、この長老たちは、牧者でもあります。「牧させる」とありますね。それと、監督でもあります。ペテロも第一の手紙 5 章で、長老と言いながら、牧しなさいと言っています(5:1-2)。今の教会の制度では、監督制、長老制、会衆制というように分かれています。本質的には、教会に立てられた人々は、長老であり、監督であり、そして牧会者なのです。長老というのは、尊厳を表すことばです。地域の代表者みたいな人を長老というわけですが、教会の代表的存在です。次に監督は、その名のとおり監督します。全体を見て、導いていきます。そして牧者は、羊飼いです。羊飼いのすることは、第一に養うことです。第二に世話をすることです。傷ついた羊があれば、癒します。第三に、守ることです。狼が来たら追いはらい、体を張って守ります。

パウロが始めに命じたのは、「自分自身と群れの全体に気を配りなさい」です。群れの全体の前に自分自身と出てきます。まず、自分自身がどうなのか？ということが問われます。私が牧者たちの大会、Pastors' Conference に行きますと、必ず問われるのがデポジションです。教えるためだけに聖書を読むのではなく、それとは関係なく、主との時間を取っていますか？と言われます。パウロはテモテにも同じことを話しました、「I テモ 4:16 自分自身にも、教えることにも、よく気をつけなさい。」

そして、パウロは注意深く、教会を「神の教会」と呼んでいます。牧者の所有している羊ではありません。神の所有している羊の群れを牧しているのです。それをわが物のようにして支配してはいけません。そして、その教会は、「神がご自分の血をもって買い取られた」と言っています。ここにキリストご自身と神が一体であることがよく分かります。父なる神のご自分の血ではなく、キリストの血なのですが、御子が流す血は父の血でもあるのです。教会とは、キリストの尊い血によって買い取られたのです。そして、監督に立てられているのは、人の意志によるのではなく、「聖霊」

ご自身ということです。

²⁹ 私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。³⁰ また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。

偽教師たちのことを「狂暴な狼」と呼んでいます。それは羊飼いが世話している羊の群れに狼がやってくるからです。恵みの福音から違ったことを教え、高ぶり、争い、あるいは自分の利得のために異端を教え、そういった者たちが入り込んでくるということです。パウロはエペソ人への手紙の中でも、「4:14-15 私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることなく、むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において、かしらであるキリストに向かって成長するのです。」と言いました。みことばによって健全に成長することこそが、狼から守られる方法です。そして先に話しましたように、テモテがエペソで牧会している時に、実際に違った教えをする者たちが出て来たのです。そして黙示録を見ると、エペソにある教会で偽使徒を見抜いて、よく耐え忍んだとイエス様からほめられています(2章)。

ここでとても悲しいことは、狼が外から入り込んでくるだけでなく、「あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくる」ということです。パウロによる監督がなくなった後に、我こそはということで、自分自身に引き込む者たちが起こってくるということです。だからこそ、パウロは牧会ということの大前提を教えました。それは神の教会なのだ、神ご自身の血によって買い取られた教会なのだ。あなたが自分で立っているのではない、聖霊によって初めて立っているのだ。自分自身に気をつけなさい、ということ。

³¹ ですから、私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがた一人ひとりを訓戒し続けてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。

一つ教えては、また過ちに陥り、そういった繰り返しの三年間でした。涙をもって、一人一人に訓戒しつづけました。今、全体に話していますが、実はパウロはその一人一人に丁寧に、訓戒していたのです。そのことを思い出して、目を覚ましていなさい、過ちの中に戻ることがないように戒めています。

4C みことばと残した手本 32-35

そして最後の言葉に入っていきます。

³² 今私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長さ

せ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。

パウロは、自分がいなくなっても、神ご自身がそのみことばによって、成長させてくださることを信じてきました。また、それは恵みのことばであって、彼ら自身の努力によるのではなく、一方的な神の憐れみによって成長していくと信じてきました。指導者がいなくなっても、その群れが広がっていくとき、神ご自身が成長させてくださっていることを思います。そして、その人たちは聖なる者とされています。成長するとは、キリストの似姿に変えられているということです。そして、その行き着くところは、キリストにあって御国を受け継ぐということです。先に話した御国のこと、キリストが再び戻られて神の国を立て、それを受け継ぐことです。

³³ 私は、人の金銀や衣服を貪ったことはありません。³⁴ あなたがた自身が知っているとおりに、私の両手は、自分の必要のためにも、ともにいる人たちのためにも働いてきました。

今、パウロがこんなことを言っているのは、パウロは真正な使徒ではない、不適格だ、みたいな批判が少しずつ出て来たからでしょう。自分が何か悪いことをしたか？と説いています。むしろ、そういつて批判している者たちのほうが、偽教師であり、人々からむしり取るようなことをします。過去にも、疑いがかけられた預言者がいました。サムエルです。サムエルに対して、王をくださいと民が求め、サムエルの預言者の働きを拒みました。あたかも、サムエルが不適格であるかのようにみなしました。それで、サムエルはサウルをイスラエルの王として立てた後でこう言いました。「Ⅰサム 12:3 さあ今、【主】と主に油注がれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを虐げ、だれかを打ちたたいたっただろうか。だれかの手から賄賂を受け取って自分の目をくらましたっただろうか。もしそうなら、あなたがたにお返しする。」これらのことは何もしていないのです。

パウロは、福音宣教の働きの報いを受ける権利はありましたが、天幕作りを、コリントだけでなくエペソに置いてもしていたことが分かります。それは、模範を示すため、食べ物にしている偽教師たちが多くいるなかで、その違いをはっきりと示すためでした。

³⁵ このように労苦して、弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が『受けるよりも与えるほうが幸いである』と言われたみことばを、覚えているべきだということを、私はあらゆることを通してあなたがたに示してきたのです。」

キリスト者の倫理というか、命じられていることです。このイエス様の言葉は福音書には書かれていませんが、言い伝えられているものだったので、パウロはここでそれを語りました。「受けるよりも与えるほうが幸い」ということです。弱い者を虐げることなく、むしろ助けなさい、労苦

しなさい、私がそうしてきたのだから、と言っています。イエス様にならうパウロの姿ですね。

2B 涙の別れ 36-38

³⁶ こう言ってから、パウロは皆とともに、ひざまずいて祈った。

ひざまずく時は、とても切実な祈りと願いを神に立てる時にする行為です。イエス様がゲッセマネの園でひざまずいて祈られました(ルカ 22:41)。

³⁷ 皆は声をあげて泣き、パウロの首を抱いて何度も口づけした。³⁸「もう二度と私の顔を見ることはないでしょう」と言った彼のそばに、特に心を痛めたのである。それから、彼らはパウロを船まで見送った。

パウロも長老たちもとても感情的になりました。首を抱いて何度も口づけしているとありますが、これは中東や欧州南部、ロシアなど広範囲で見られる習慣です。親愛を示す行為です。もう顔を見るができないという言葉で心を痛めています。エペソの教会にある愛です。彼らが兄弟と呼ぶのは、事実、そういう絆があったからです。もちろん私たちは天の望みがあり、そこに希望があります。けれども、それは感情を無視することではありません。地上では会えなくなるということは、その絆がわずかな間でも切れてしまうということです。だから、そのさみしさが涙となっています。

今回は、パウロたちのエルサレムへの旅の続きがあり、そしてエルサレムに到着し、エルサレムの教会の人々に会うところを読みます。